
とある刹那の負荷加速《オーバードライブ》

常火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある刹那の^{オーバードライブ}負荷加速

【Nコード】

N9430Z

【作者名】

常火

【あらすじ】

学園都市第三位、^{オーバードライブ}負荷加速こと常夜真純。これは彼が紡ぐ刹那の物語。

面倒な事この上ない。俺達に出来る事なんて限られてんだよ。わかったか、このビリビリ娘。

第一話（前書き）

とある科学の超電磁砲のゲーム、皆さんはもう買いましたか？
僕は買おうか買わないか迷ってます。（それ以前にお金がない）
では、第一話始まり！！

第一話

さて、困ったものだ。

どれ程困っているかと言うと俺が居候させてもらっている友人が毎回毎回、事件を持ち帰ってくるのと同じくらい。もちろん美女付きで、な。

いや、しかし、どうなのだろう。美女が付いてくる時点であちらの方がマシとも言えなくもない。ただ一つ、美女全員が友人に惚れていることの除けば……。たった一つ、その所為でいつもあいつの隣にいる俺は地獄のような苦しみを味わっている。

うん、やっぱりこっちの方がマシだな。

「オイ、コラア！！無視してんじゃねえぞ！！アア！？」

「今なら土下座して俺等の靴舐めたら許してやんよ！！ギャハハハハッ！！」

困ったなあ。物凄く困った。やっぱり慣れない事はするもんじゃないなあ。たまには我が友人を見習ってみようかと思っただが。やはり、うん、失敗した。

俺の前には五人の男達が下品な笑い声を上げている。如何にも不良ですと言わんばかりの格好をしている。別にこの人達が能力者だろうが無能力者だろうがあまり問題ない。

本当に問題なのは男達の向こうにいる人間だ。バチバチと紫電がその綺麗な茶髪から流れているの見るだけで本当に億劫になる。

「あ！！やつと見つけたわよ！！私と勝負しなさい！！」

常盤台のお嬢様が戦闘狂とは、やはり知っていたとはいえ流石にそれが現実になるとショック以外の何物でもない。別に俺は女性にメルヘンな気持ちを抱いてなんかない。そんなものはとっくの昔、正確には友人と暮らすようになってからだが、性欲の処理をした後のティッシュの如くゴミ箱に捨てた。しょうもない下ネタに走った事については謝る。だが後悔はしていない。

「めんどくさい、だるい、おなかへった、かあちゃんばんごはんまだ〜?」

どうして俺はこんな挑発するような言葉を口から吐いてしまうのだろうか。もしかして、心の底ではこの少女と戦ってみたいと思っ
ているのだろうか。だとしたら笑える、俺も戦闘狂の資質があるとい
うのか。

「ふざけんじゃないわよ!!アンタはこの私を抜いて第三位になっ
たのよ?納得できるわけじゃないじゃない!!」
「え〜。だるい〜」

ガキか、こいつは……。ガキなんだろうなあ、中学二年生だし。
一番バカな年頃だ、戦闘狂になるのも頷ける。それよりもあまり大
きな声で第三位とか言うな、照れるだろうが。だが、それと同時に
イレギュラーエイト
虚数の八番目なんて不名誉な二つ名が街中で囁かれているのだ。ま
たそれが俺にピッタリなのが腹立たしい。

「アア!?コイツまさか……。昨日ニユースでやってた新しいレベル
5か!?オイ、テメエ等!!コイツを潰せば……」

リーダーらしき男が手から炎を生み出す。紅蓮に輝くそれは渦を
巻きながら球体をかたどっていく。見る限りではレベル4と言った
ところか。この男どうして不良なんかしてんだ?十分エリートだろ
うが、勿体ない事この上ない。他の四人も何やら能力を発動してい
る。そいつ等にしてもレベル3くらいはあるだろう。普通に暮らせ
ばいいのに……。

「死ねえええええええ!!」

ボスモブ（モブキャラのボス）が馬鹿でかい炎の球を俺に目かけ
て投げつけてきた。まるで小さな太陽みたいだ。と言うかこんな威
力のものを人に向って投げるとは何事か。許せん。

「おい、ピカチュウ。よく見とけ」

「誰がピカチュウよ!!」

では、見せつけるとしようか。この俺の能力を。

たぶん視認することなどできないだろうが、それでも結果だけを

見せつければ十分だ。

演算を開始すると同時に俺の能力が発動した。

「え？」

まず、聞こえたのはそんな呆けた声。

超電磁砲、電撃姫、ピカチュウこと御坂美琴が口から放ったのはそんな間抜けな声だった。その反応を見ただけで俺は満足できた。「アンタの能力初めて見たけど、どうなってるのよ……」

「見ればわかるだろ。こいつ等ボコっただけ」

顔を腫れあがらせて地面に倒れている不良達を指さしながら俺はさも当たり前のように答えた。拳の痛みを必死に隠すことを忘れずに。後で薬局に行つて湿布を買わなくては……。予想外の出費だ。

しかし、美琴が呆けるのも無理はない。こいつからしたらそれは一瞬にも満たないのだ。瞬きをするよりも短い間の出来事なのだから。

「そんなのは見ればわかるわよ。聞いているのはどうやって、方法を聞いているの」

そんなもの教えるわけないだろう。そんな簡単に種明かしをしたら面白くもなんともないし、何よりもミステリアスな男はモテるはずなのだから。

「テレポートです」

その瞬間、電撃の槍が俺に向つて飛んできた。もちろん、そんな攻撃も俺に対しては無意味だが。

「どうして当たらないのよ!!」

「当たったら死ぬだろうが!？」

電撃は俺の数センチ横を通り過ぎて行った。正確に言うと、俺が0、00000000001秒前(かなり大雑把)前にいた所を通り過ぎて行った。ここは路地裏なので、電撃が表通りにいた通行人

に直撃しなかつた事を祈ろう。

「とにかく、私と真剣勝負しなさい!!」

「わかつた」

「いいから勝b……へ?」

「だから、その真剣勝負を引き受けるって言ったんだ」

美琴の性格からして勝負するまで追いかけることは必須。俺は彼女の性格を全部理解している。ならば、今ここでこの戦闘狂に現実とやらを見せつけてやった方が後々が楽なのだ。

「場所は……あそこでいいだろ?ほら、上条が初めてお前と戦ったあの河原」

「いいけど……ってあれ?アンタがどうしてその事知ってんのよ?まだその時って私達会ったこともなかつたでしょうが」

「まずい。ミスった。ボロが出た。あまり調子に乗りすぎるとダメだなあ……」。

俺は額に冷たい汗が流れるのを感じながら愛想笑いを浮かべる。

「上条から聞いたんだよ。お前との思い出の場所だつて言つてたぞ?」

「そ、そんな事ノノ」

ああああああああ!!!!あの野郎、やっぱりボコボコにしないと気が済まないツ!!

「おい、いつまで惚気てんだ。これから勝負するんだろ?」

「惚気てなんかいいわよ!!」

まったく、腹が立つことこの上ない。

「夕焼けが二人を照らしている。彼等はこれから己のすべてを賭け

t
」

「変なナレーション挿んでんじゃないわよ!!」

そうか?こういう時って雰囲気は大切だと言っじゃないか。

「そんなもの大切にするのなんかアンタだけよ」

俺達は今、例の河原に来ている。夕日の光が眩しい。今日の夕飯の当番は上条だから問題ないだろう。そうでなかったら美琴の狂言の相手なんかしていない。俺の他にもう一人シスターさんが居候しているのだが、物凄く暴飲暴食なのだ。それはもう思っていた以上に。だから、当番の日には台所で地獄を見る羽目になる。

「じゃあ、そろそろ始めるか」

俺達はお互いに向き合う。距離は大体5メートルほど。俺からは手を出さない。まずはレディーファーストだ。紳士はそのことを決して忘れてはいけないのだ。

美琴の体の周りをバチチツと青白い電流が迸っている。おそらく、人を簡単に焼き豚にできる威力だと思われる。中学二年生の少女なのに物騒なことだ。

「おいおい、その電流は見かけ倒しか？お前から仕掛けてきてもいいんだぞ」

「じゃあ、遠慮なくやらせてもらおうわ！！」

そんな台詞を吐きながら美琴は地面を蹴って俺に向ってくる。筋肉に微弱な電流でも流しているのか、その速さは異常である。そんな考察をしている間に俺の懐に潜り込んだ彼女はハイキックなるものを入れてきた。しかも、俺の首に。

そんな事をすればどうな事態になるのか想像できないらしい、この娘は。

まあ、俺は俺でそんな攻撃簡単に避けることが出来るのだが。彼女は様々な技を俺に向けてくる。そのどれもが簡単に人を殺せるようなものなのが恐ろしい。まったく、こいつは将来、格闘家にもなるつもりなのだろうか。

「アンタのそれ、どう考えてもテレポルトじゃないでしょ」

息を切らしながら、俺を睨み付けてくる。そもそも肉弾戦なんか俺には無意味なのだ。例えばそれがどんな速さを誇っていたとしても「テレポルトって事にしといてくれ。説明するのが面倒臭いし、ネ

「タバレしたら勝負にならないだろう?」

「私の知り合いにテレポーターがいてね、それがどんなものかよく知ってるのよ」

「ああ、あの百合っ子ちゃんね。会ったことないけど、一度会ってみたいな。」

「へえ。じゃあ、優しい俺が君にヒントを上げよう。俺に物理的な攻撃なんか意味を成さない」

「今の俺はおそらく人生で一番のドヤ顔になっているはずだ。少し、恥ずかしい。」

「そんなのヒントって言わないわよ!!」

「ピーピー」とうるさい小娘だな。十分にヒントだと思う、お前が俺に勝てないって言う事実そのものなのだから。

「……………」

「どうやら先程の独り言が口から出ていたらしい。美琴が纏う電撃がゾツとするような音を立て始めた。」

バジジジジッバジイッバジジジジッ

彼女の足元の雑草が一瞬で黒炭と化している。流石に俺もあれを喰らうと死ぬだろう。

そんな軽い危機感を抱いていると、俺の足元から突然黒い何かが生えてきた。それは俺を覆い隠すようにして球体となった。すっかり砂鉄の事を忘れていた俺のミスだ。

「なッ!?!」

「捕まえた!!」

「してやったりと嬉しそうな、勝利に酔った声が腹立つことこの上ない。」

「だが、これだけでは終わらないのが電撃娘だ。なんと、この娘はポケットからコインを取り出し、指に乗せやがった。まさかの超電磁砲である。この絶対に避けられないであろう状況にその技を向けるとは何事か。彼女は人殺しになりたいらしい。」

そして、何の躊躇もなく黒い球体に向けてブツ放しやがった。球

体となっていた砂鉄は跡形もなく吹き飛び、黒い燃えカスと言うか何というかよくわからない跡だけが残っていた。

「……え？」

呆然とした美琴の声。この声を聞くのは本日で二回目である。何に対して呆然としているのか。まさか俺が何の行動も起こさなかった事に驚いているのか、それとも、俺が跡形もなく消し飛んだ事に驚いているのか。後者だとしたら恐ろしいものである。ゲーム感覚で人殺し、まさか本当に死ぬとは思ってませんでしたって感じか？

「人殺しの気分はどうだ？お嬢ちゃん」

俺は美琴の背後から声を掛ける。その通り、俺は砂鉄に捕まっただけでいなかつた。そもそも、あれに捕まっていたら、美琴が超電磁砲の様子など説明できる筈などないのだから。

「ひッ！！」

ビクリと肩を震わせてこちらを向く美琴の顔を見て俺は仰天した。その目はまるで泣いているかのように赤かったのだ。もしかしたら、夕日の所為かもしれない。

「……泣くならあんな事しなかつたらよかつたじゃないか」

正直に言つと俺が泣かしたみたいで何か嫌だ。そして俺は美琴に近づいて行く。ハンカチでも持ち歩いていた方がよかつたな。今度セブンスミストにでも買いに行こう。

「泣いてなんかいいわよ！！」

だが、そんな俺の気遣いもむなしく、この小娘は電撃の槍を飛ばしてきやがつた。さすがに今のは俺もカチンときた。

「はい、終了」

俺は彼女の額にお得意（上条曰く、とてつもなく痛いらしい）のデコピンを放った。一応、女の子なので威力は抑えはしたがそれでもバガンと変な音が響いた。

「ッ！？いったああああ」

美琴は驚きと共に額を抑えてしゃがみこんだ。いちいち大袈裟なガキだな。まあ、驚くのは無理もないか。俺と美琴の距離は三メー

トル程あつたが、彼女にとっては一瞬でそれこそ 初めから目の前にいたように俺は移動していたのだから。

「じゃあ、俺の勝ちって事でバイビ〜」

死語となつた台詞を吐きながら俺は友人宅へと帰宅した。

決して広いとは言えない寮だが居候させてもらっている以上は文句など許されない。

エレベーターに乗ろうとしたと事で後ろから何かに激突された。

一瞬、刺されたのかとヒヤリとしたが何てことはない。俺にぶつかつてきた奴はよく知る人間だった。

「よー。元気かー？」

隣人であり、また友人でもある土御門元春の妹、土御門舞夏。掃除ロボの上に乗る、クルクル回転している。まったく、よく酔わいな、と感心する。

「ああ、元気元気。お前がぶつかる前まではな。見る、制服が引つ掛かつて破れたじゃないか」

「上条とインデックスがお前の帰りをまだか、まだかと待ってたぞー」

無視ですか、そうですか。それにしても、今日の夕食の当番は俺じゃなかった気がするが。仮のそうだとしたら上条に借りを作ることになる。まあ、現時点で居候させてもらっているので十分な程の借りがあるのだが。

「ま、いいか。それを伝えるためにわざわざ出迎えてきてくれたわけね」

二人でエレベーターに乗る。

「そう言えば、お前も土御門の夕食を作らないといけないのに油売つてて良かったのか？」

「もう作つたから問題ないぞー。後はお前だけなんだからなー」

確かにこの女はこんなトロい喋り方をするがメイド学校に通っており、かなり優秀なのだと聞く。本当に人は見かけによらない。

そして、俺は自分の部屋（上条の部屋）へと辿り着く。どういう訳か舞夏も俺の後ろについてきている。

「ただいま」

いつもの挨拶。普段なら上条とインデックスの「おかえり」と言う声が奥から聞こえてくるのだが今日は違った。

「「「おめでとー！！」「」」

部屋にいたのは上条、インデックス、そして土御門。いつもは男らしい料理が並んでいる机には今日に限って豪華な食事が並んでいた。

「何だ、これ」

「いや」。昨日はいきなりだったから何もできなかったけど。改めておめでと、常夜」

「おめでとうなんだよ！！」

「隣にレベル5が住んでるなんて鼻が高いにや」

インデックスは嬉しそうに顔を俺に向けてくる。

ああ、そうだった。俺こと常夜真純はレベル5になったんだ。なんて事を照れ隠しに思いつつ、恐らく一生にそう何度も言わないであろう台詞を吐いた。

「ありがとう」

第一話（後書き）

オリ主、落ち着いた人間ですが後々キャラが崩壊します。僕ことうい
うキャラの人間って苦手なんでw w

これに懲りず第二話も読んでくださると嬉しいですよ。

あと感想なども送ってくださいると嬉しいですよ。よろしくです!!
では、また!!

第二話（前書き）

明けましておめでとございます。

第一話の最後に話を少しだけ付け足したのでそれを読んで頂けると嬉しいです。

第二話です！！よろしくお願いします！！

第二話

「なあ、最近お前と会ったらロクな事にならないんだけど」

薄暗い裏路地で俺は横に立っているであろう電撃娘に話しかける。女と二人で裏路地とか何かエロい感じがするが、相手が美琴なら色気の欠片もなくなる。仮に襲いかかっても、逆に返り討ちに合ってチャーシューになることは間違いない。まあ、中学二年生を相手にそんな気持ちになるほど俺も飢えてはいない。

「私の所為にしないでよ」

横から張り詰めた、若干震えた声が聞こえる。まったく、珍しい声を出すじゃないか。まあ、それも致し方ないかも知れない。何せ、数人の男が血まみれで倒れているのだから。このお嬢様は普段から荒事を引き起こしてはいても、このような生臭い、生々しい光景は初めてなのかもしれない。

「いや、だってさ、お前に追いかけて逃げてきた先でこの状態だけ？明らかにお前が俺を厄介ごとに導いたんだ」

そう、俺は学校帰りに歩いていた所、この女に見つかり勝負を挑まれ逃げてきたのだ。どうやら、先日の真剣勝負はこの少女の中では無かった事になったらしい。まったく素晴らしい頭をお持ちのようだ。それでも俺の能力を使えば逃げる事なんて簡単なのだが、このビリビリ姫に構っている辺り、我ながら相当のお人好しと言うか……馬鹿なのだろう。

「そんな事よりこの人達助けないと!!」

む、確かにそうだな。と言うよりも生きているのか？結構な出血量だが。レベル5って言ってもできる事なんて結局は限られるんだよなあ、なんて、そんな事を考えながら俺は一步踏み出す。

ピシヤリ

ピシヤリ

足を踏み出すたびに地面に広がった血が跳ねて、俺のスニーカー

を汚す。ああ、鬱だ。家に帰ったら洗わないといけない。まったく、とんだ災難だ。

そこでふと気付く。

「おい、ビリビリ娘。何やってんだ、お前も手伝えよ」

「わ、わかつてるわよ」

しかし、その顔色は悪く、足はふらついている。まあ、普通の反応だわな。レベル5、超電磁砲^{レベルガン}なんて呼ばれているが所詮は中学生の小娘だと言う事か。ある意味で俺は美琴の反応に安心していた。逆にここで彼女が怖気もせず手当てをしていたのならば、そっちの方が怖い。

「もういい。救急車を呼んどいてくれ。それが終わったら人を呼んできてくれ。手伝ってもらわないと俺一人じゃ無理だ」

その切って捨てたような俺の反応に美琴は一瞬、キツと俺を睨んだが、すぐに表通りに出て行った。少し言い方が悪かったかもしれないと反省をしながら俺は応急処置を進める。全員の脈も、呼吸も一応ある。それでも、やはり出血が激しいため乱れているから取り敢えずは血を止めないとな。

「縛るもの……縛るものはと」

辺りを探してみるが見当たらない。やはり、都合よく布切れは落ちていてくれないようだ。本当は物凄く躊躇われる事なのだが致し方がない。俺は着ていた制服のカッターシャツを脱ぎ、それを引き千切った。

二枚しかない貴重な俺のカッターシャツだ。本当に今日は災難だった。

サイレンの音と共に数台の救急車が病院へ向かって行った。行先はちゃんと指定しておいた。俺も以前にお世話になったカエル顔の先生の病院だ。あの人には本当にお世話になったのだ。感謝しても

感謝しきれない。尊敬していると云ってもいい。この俺がここまで言つと気持ち悪いだけか……これ以上はやめておこう。

「おい、いつまでそんな所にいるつもりだ？」

俺は道の端でポツンと佇んでいる美琴に声を掛けた。

「うるさいわね。可笑しいって思ってるんでしょ……アンタも」

沈んだ声でそんな事を言う彼女の口調はいつもより弱々しかった。

この女もこんな声を出すのだと今更ながら思い出した。

「超電磁砲レベルガンだなんて言われてるけど、実際は血を見ただけで震えちゃうなんて……」

いや、凹み過ぎだと思つが。レベル5とかあまり関係ないだろう、こつこつのは。だから、俺はその事をわかつていない彼女に言つてやる。

「関係ないだろう、そんなのは。お前はお前で出来ることをした。

結果、あの人は助かつたんだ。それでいいじゃないか」

まったく、なぜ俺がこんな上条じみた事を言わなくてはいけないんだ。鳥肌が立つ。やっぱり、俺には上条節は向いていないようだ。

「何よ、アンタがそんなこと言つなんて。気持ち悪い」

それでも、この女が少しでも元氣になつたのなら無駄ではないのだろう。

と格好つけていた所で俺は肩を叩かれた。

後ろを見ると二人の女子がにこやかに笑つて俺を見ていた。この笑みは絶対に面倒な事になると俺の男の本能が告げる。一人はツインテールで美琴と同じ常盤台中学の制服を着ており、もう一人は眼鏡をかけていて……その……胸がデカイ。

「なんででしょうか？」

わかっている筈なのに口から出てきたのはそんな台詞。

「風紀委員ジャッジメントです。あなたが第一発見者ですね？お話を聞かせてもらえますか？」

居乳眼鏡の女が俺に対してそう言つてきた。俺に？俺だけに？そう思い、横を見ると美琴の姿が忽然と消えていた。

あのアマア……次会つたらただじゃおかない。噛み締めた歯がミシリと音を立てる。しかし、前からの視線に気付いた時にはもう遅かった。

二人とも俺の形相にドン引きしていた……。

「ま、まあ、話を聞くだけですから」

「そんなにお時間は取らせませんわ」

どうやら俺は余程酷い顔をしていたらしい。まったく、恥ずかしい事この上ない。先生をお母さんと間違えて呼んでしまった時と同じ位の恥ずかしさだ。

「あ、はい。わかりました」

そのまま俺は風紀委員^{シヤツジメン}の支部まで連れて行かれ、解放された時には午後八時を回っていた。

待遇は悪くなかったが、椅子に座りっぱなしで同じような質問を何度もされるとさすがに疲れる。今日は俺が夕食の当番だったが連絡して上条に代わってもらった。これでまた借りを作ってしまったのかと思うと……まったく、胃が痛くなる。

そんなセンチな気分建物から出ようとしたところ、一人の人間が出口の前にいた。

「よう。よくまあ、ぬけぬけと俺の前に来られるもんだな」

「悪かったわよ。だから、こうして迎えに来てあげてるんじゃない」

その間、こいつはファミレスかどこかで美味しい美味しいパフェでも食べていたんだろう。まったく、腹が立つ事この上ない。

「言っとくけどパフェなんか食べてないから」

どうやら俺はまた思っていたことが口から出ていたらしい。困った口だ。そのうちチャックでも付けられるかも知れない。

「じゃあ、お詫びにパフェでも奢ってくれ。何か、甘いものが食べたい気分だ。それぐらいはいいだろ？」

我ながら器の小さい男だと思う。だが、俺はそれでも一向に構わない。世の中は等価交換だと何処かの錬金術師が言っていた。この場合はパフェが妥当だろう。期間限定ジャンボイチゴパフェがな。

「はいはい、わかったわよ」

「ついでにステーキセットも食べたい」

「アンタ、その組み合わせはお腹壊すわよ？」

お前は俺の母親か。油っこいものと冷たいものを同時に摂るとお腹を壊す可能性がある事くらい知ってる。いちいち言われるまでもない。

「俺の腹を舐めるなよ？そんな攻撃は俺にとって無意味だ」

俺の胃腸は物理的ダメージにとっても強いのだ。精神的なダメージにはとても弱い。試験とかになると緊張してすぐにお腹が痛くなる。

「はいはい」

美琴はまるで子供扱いをするような口調で俺にそう言った。

まったく、その微笑みが腹の立つ事この上ない。

「それは本気ですか？固法さん」

啞然とした俺はスプーンに乗っていたプリンを口に入れそびれてしまった。あの血だまり事件から五日がたった今日。いきなり風紀委員の支部長、眼鏡巨乳の固法さんに呼び出されたのだ。眼鏡巨乳………良い響きだ。実に良い。俺の好みをそのまま体现したような人だ。

俺の性癖の暴露はこの辺にしておこう。

あの事件、実は解決していないのだ。しかも、被害はあの後も増えている。いずれの被害者も身体をバツサリと切られている。まるで鋭利な刃物でも使ったかのように。幸いに死者は一人も出てはいないが重症である事には変わらない。狙われているのは不良の男達ばかり。

「別に強制って訳じゃないのよ？あくまで調査協力依頼って感じだから」

今の言葉はほとんど協力しろと言っているのと同じような気がするが。しかも、奢りだというから注文したが、これもそういう訳ですか。四百八十円、これが俺の依頼料か。これだから女というやつは。

「そんなつもりじゃ……」

失敗した。また口から独り言が零れていたらしい。固法さんは居心地が悪そうに、申し訳なさそうに目を泳がせている。これは冗談抜きでカエルの先生に口にチャックを付けてもらわないといけないかも知れない。

「……犯人の」

「え？」

「犯人の目星とかは付いているんですか？」

四百八十円のチョコレートプリンパフェ、上等じゃないか。それに固法さんのふくよかな胸も拝めたことだし、報酬としては十分だ。まったく、誰かの為に、人々の為に働くなんて我ながら馬鹿らしいが等価交換なら仕方がないか。

「申し訳ないけど、これだけしか手がかりがないの」

そう言っただけ彼女が俺に差し出したのは数枚の資料。内容は被害者達の証言である。

仲間と裏路地で駄弁っていたところ、突然、仲間の身体から血が噴き出したとのこと。次々と倒れていく仲間達だが襲撃者の姿は視認出来なかつたらしい。ただ、痛みの中で覚えている事は風が異様に強かつたとの事。

「いや、固法さん。これどう考えても大気系の能力者じゃないですか」

「大気系の能力者がどうやってたら姿まで消せるの？」

空気の層を操り、幾重にも重ねる事で屈折率を変えて覆った物を透明化させる事も可能な筈だ。

「なるほどね。それだと、そこまで高い演算能力を持つ能力者は数が限られてくるわね」

大体レベル4くらいと言った感じだろう。しかし、空力使いのレベル4など珍しくはない。五十人以上はいるはずだ。一人一人調べ上げる間に更に犠牲者は増えていくことになるだろう。

さてさて、どうしたものか。

俺自身が囷になるというのもアリだが、いきなり背後からズバツなんて言うのは流石に遠慮したい。上条とかはその辺りが凄いと思う。傷だらけ、血塗れになっても立ち上がってくるんだから。普通は痛くて動けなくなるもののだが、あいつはどうやら神経が麻痺しているらしい。

俺は事件が起こった場所を示した地図を見た。

赤い点を目で追っていく。しかし、何の法則性もない。おそらく犯人は行き当たりばったり、見つけ次第に襲っているのだろう。

「うーん。パトロールぐらいしか出来ないかなあ」

「それだけでも凄く助かるわ」

固法さんは嬉しそうに顔を綻ばせた。十中八九、俺はこの人の手の上で踊らされている気がする。まったく、女と言うものはどうしてこう恐ろしいのか。

しかし、いざパトロールと言ってもそんな都合良く犯人が現れるわけでもなく。あれから一週間が経った。その間も被害者の数は増え続け、犯人も手馴れてきているような気がする。

アンチスキル
警備員も当の昔に介入しているが、目新しい事は何も掴めてはいないらしいとのことだ。

いい加減に俺も面倒になってきたのが本音ではある……と言うのは全くの嘘である。むしろ俺はこの時間をとっても楽しみにしているからだ。何故か？それは固法さんと一緒にパトロールが出来るからである！この常夜真純、近頃は上条の不幸が伝染したのではないかと言うほど不幸であったのだが、どうやらそれは間違いだったら

しい。

まったくもって苦にならない。これなら毎日、夕食の当番をやってもいい。……いや、やっぱりそれは無いな。

「やっぱり慣れませんか……」

「え？何が？」

しかし、たった一つだけ……たった一つだけ俺には我慢できないことがある。

「固法さんは怖くないんですか？スキルアウトがたむろしている中を歩くのは」

俺の質問に対して彼女の答えはプツという吹き笑いであった。何が可笑しいのだろう。スキルアウトの恐ろしい視線の中を歩くなんて、俺一人だったらお腹を壊している。

「ごめんなさいね。仮にもレベル5のあなたがそんな事を言うなんて思ってもいなかったから」

「そうですね？視線と言うのは案外気になるものだと思いますが」「うん。私はもう慣れちゃったかな」

そんな話をしながら俺達はパトロールを続ける。

それにしてもスキルアウトの皆さん、メンチ切り過ぎである。もし、腕に風紀委員（仮）の腕章を付けていなければ即絡まれているだろう。そうなると負ける事は絶対にならないにしても面倒臭い事この上ないのだ。

「も」

うん？何か聞こえたような気がしたが。そう思って隣に並んでいる固法さんを見る。

「どうしたの？常夜君」

「何か聞こえませんでした？」

そう？と彼女は首を傾げる。やはり、空耳だったようだ。幽霊とかだったら怖すぎる。

科学の街でそんな事を本気で心配している俺がいた。

「今日はこれぐらいにしま」

固法さんが俺にそう言おうとした瞬間、ついにそれは起こった。空気が爆発した、としか言うようがない。

それはまさしく瞬間的なものであった。ビルの壁は抉れ、地面のアスファルトには小さなクレーターが出来ていた。

たむろしていた不良達の身体はズタズタに引き裂かれて真っ赤な血が噴き出していた。ものの数秒で鼻につく独特の生臭い、鉄さびの匂いが辺りに充満し始める。

「大丈夫ですか？固法さん」

俺は腕に抱えている彼女にそう言った。彼女は一瞬何が起こったのかわかっていない顔をしていたが目の前の惨状を見た瞬間、その顔が見る見るうちに風紀委員ジャッジメントのものへと変わっていった。

「もうこの人達は無理ですよ」

全員が急所をバツサリと裂かれているのだ。救急車を呼んだとしてもとてもじゃないが間に合いそうにない。それにすでにもう息をしていない者もいるようだ。

そして、固法さんが俺の腕に気付いて息を飲んだ。

「常夜君、腕が……」

「流石にここまでになるともう何も感じませんよ。見えない攻撃って言うのは厄介ですね。これは物理攻撃は効かないって言うのは撤回かな」

俺の右腕から夥しい量の血がポタポタ零れて、足元を汚す。痛みを感じない上に感覚すらなく、ピクリとも動かせないことから神経が切れているのかも知れない。ザックリと切れたその部分はピンク色やら白色やら思っていたより綺麗な色をしていた。

「ボーとしてないで止血しないと……」

確かに止血しないと大量出血で死ぬかもしれない。

固法さんは鞆から止血用の白い三角巾を取り出し、手際良く俺の腕を縛る。流石は風紀委員ジャッジメントと言った感じだろうか。俺の傷を間近で見ても眉一つ動かさなかった。

「応急処置は一通り済んだからあなたは警備員に連絡して、私は犯

人を追うから」

「無駄ですよ。あなたじゃ返り討ちに合うのが落ちです」

悲しいかな、どうも俺はこんな言い方しか出来ないらしい。だからモテないのだろう。俺も上条のように少しでも人を思いやる気持ちというのを持ち合わせていればな、なんて……全く思わない。あんな生温い考えは気持ち悪いと言うのが本音だ。本人には絶対言わないけど。

だから俺が行く。

「ダメよ！！あなたはすぐにでも病院に行かないと」

能力を使った俺には彼女の言葉は最後まで聞くこと出来なかった。

「よう。凄いな、それならレベル5も夢じゃないぞ」

俺は目の前の制服姿の人間にそう投げかける。その言葉は嘘ではない。おそらくレベル4とレベル5の中間地点と言った感じだろう。まあ、そこから先に進めるかは才能の問題だが。

「そんな事、私興味ないわ」

凜とした声がそう素っ気なく答える。顔立ちは整っていて、病的に肌が白い。真っ黒な髪を腰まで伸ばしたその姿は日本人形のようにだ。年は俺と同じ高校生くらいか。

「何だ、そうなのか？まあ、どの道お前はもう時間割なんて受けられないのだろうけど」

「そうかしら？」

「そうだ」

まったく、どんな理由でこんな事件を引き起こしたのだろうか。可愛い顔してとんでもないな。外見に惑わされるなどはこの事だろうか。

この女の心の中なんて俺は精神系の能力者ではないのでわからない。興味もない、ただ俺がやることはこいつを叩き潰して警備員アシキスギルに

は成り得ないのだ。ダメージは蓄積していく。

「が、はあ　ぐッ」

壁に寄り掛かった女は口から血の塊を零す。どうやら俺の攻撃は上手くいったらしい。おかげで俺も体中ボロボロだが今の段階に設定しておけばすぐに治るだろう。

「まさか、あなた………オーバードライブ 負荷加速？」

おお！！イレギュラーエイト虚数の八番目とは言われなかった！！ちよっと………いや、かなり嬉しい。

「大人しく連行される気になった？」

彼女は虚ろな瞳で何処かを見ている。俺には見えない何処かを。大抵、こんな目をする奴はロクでもない事を仕出かす。上条と事件に関わってきて嫌と言うほど見てきた目だ。

「私はわたしはワタシはああああアアアア！！！！」

女はそう絶叫しながら真空刃を四方八方に放ち始めた。流石に生身であれが当たるとタダじゃ済まされない。壁やアスファルトはズガツと言う嫌な音を立てて抉れ、ガラスなんか音もなく切断されている。それだけじゃない。女は頭を抱え、身体からも血が噴き出し、周りを赤く染め上げている。

能力の暴走だ。

それまでと比べ物にならない程の空気の刃が女を覆い、また、それを周りに放っていた。今、むやみに近づけばサイコロステーキになる事は避けられない。

「ああ、本当に面倒な事この上ない」

放っておけば、勝手に自爆してくれるが今回はこの女を捕まえなといいけないのだ。固法さんの為だ、致し方ない。

「おい、女。俺の負荷オーバードライブ加速を見るのはお前が初めてだ」
時間が止まる。

正確には止まっているわけでない。そんな事はあり得ないのだ。あくまで俺の視点から見た風景がそう見えるだけだ。あまりにも俺が速過ぎるために　そう錯覚するだけだ。

俺の全てが加速する。

「終わりましたよ、固法さん」

俺は気絶させた女を背負って表の路地に出たところで警備員アンチスキルに何かを話している固法さんに声を掛けた。しかし、俺を待っていたのは説教の嵐。

「まったく、最初に捜査協力してもらった時に単独行動は禁止って言ったわよね？」

「はい……」

この人、本当に怖い。もしかしたら、その辺いる不良よりも怖いかも知れない。しかし、ふと固法さんの声が聞こえなくなる。

「え？」

あれ……。固法さんの顔が傾いている。目がおかしくなったのかと思ったのだが、なんて事はない。俺が傾いているだけだ。激しく地面に激突しながら、薄れていく意識の中こう思ったのだった。

ああ、今日は災難な事この上ない。

第二話（後書き）

長い駄文に付き合わせてしまい申し訳ありません。

楽しんで頂けましたか？次回もよろしくお願いします。
感想など頂けるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9430z/>

とある刹那の負荷加速《オーバードライブ》

2012年1月1日00時59分発行